

推しに隠れて、愛される。

——本音は喉の奥

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話 声、聞かせて

ユア・ミックスの全国ツアーは、各地で大成功を収めていた。

大崎一郎は、バンドの中心として、どの会場でも変わらぬパフォーマンスを見せ続けていた。

けれど、東京に残る彼女の顔が常に頭をよぎっていた。

移動中の車内でも、ホテルの窓から夜景を見ても、ふと気を抜くと彼女の声や体温が蘇ってくる。

「東京、帰りてえ……」

そう何度も思った。けれど現実には、甘くない。

ツアー地での空き日は、たとえ二日間あったとしても、ローカルテレビの収録、ラジオ出演、地元メディアとの打ち合わせ、プロモーションがびっしり詰まっていた。

東京に一旦帰る、という選択肢はなかった。

それでも二人は、離れていても繋がっていた。

夜、通話で、声だけでお互いの身体を慰め合った。

触れられないけれど、想いをぶつけ合い、孤独な夜を何度も乗り越えた。

パソコンの電源を落とし、手帳を閉じると、サナはふうつと深く息を吐いた。

この数週間、事務所に泊まり込みで、まともに寝た日はなかった。海外でのライブ配信の使用権確認、グッズの無断販売トラブル。

翻訳が噛み合わないまま先方とメールを何十往復もして、そのたびに契約書を引っ張り出して、細かい条文を洗い直した。

一郎のいない東京で、ひとり。会えない寂しさも、不安も。

マネージャーとしての責任でごまかしながら、ようやく今、全部の案件に“完了”の印がついた。

タスク管理ツールのステータスが「処理済み」に変わるたび、画面越しに誰かに褒められたような気がした。

でも本当は、直接聞きたかった。

一郎さんに、「頑張ったな」って——ただ、それだけを。

スマホを手に取り、「電話」のアイコンを開く。固定ピン止めされた一番上には大崎一郎の名前。指先でその名前をなぞる。

《電話、してもいいですか？》

メッセージを送って、スマホを胸に抱えた。

少しして、着信。

「ん。おつかれ」

聞き慣れた低音。電話越しなのに、耳の奥がぞくりと震える。

「ツアーお疲れ様でした。今日、最終日でしたよね」

「ん、さすがに疲れたわ、喉いてえ……」

一郎が小さく咳をしながら言った。

「今日で……私も全部、終わったんです、グッズTシャツの二次利用、あと、オンラインライブのアーカイブ配信も許諾とれました」
くすりと笑う声。

「んじゃ、今夜は俺たち、何にも邪魔されないってこと？」

「……はい」

素直に答えた。今夜は、彼だけのものになってもいいと思った。

「声、聞かせて」

その一言で、胸の奥がくたりと溶ける。

スマホを片手に持ったまま、もう片方の手で自分の体に触れる。

タイトスカートの裾をたくし上げ、下着越しに指を這わせると腰が跳ねた。

「下着、脱いだ？」

「い、今……脱いでます……」

足先でショーツを脱ぎ、足元に蹴り落とす。

もう、音でバレるのなんてどうでもよかった。

「触って……いつもみたいに、奥の方、ちゃんと」

指先が割れ目に沿ってすべり、濡れた音がほんのりと部屋に響く。わざと音を聞かせるように、指を抜き差しした。

「……一郎さん……聞こえてますか……？」

「うん。すごい濡れてんじゃない」

にやけたような声が、鼓膜を撫でた。

「俺の声だけで、こんなに？」

恥ずかしい。でも、興奮する。

「一郎さん……あの、もっと……声、ください……」